

広汎性発達障害児の家族への支援

—複雑な家庭環境を持つ母親へのコンサルテーションの効果—

Family Support for a child with pervasive developmental disorders

○岡村章司

(横浜市立港南台ひの特別支援学校)

Shoji Okamura

(Kounandai Hino School for Special Needs Education) (Yokohama National University)

渡部匡隆

(横浜国立大学)

Masataka Watanabe

keywords: 広汎性発達障害 家族支援 コンサルテーション

1. 問題の目的と所在

発達障害のある子どもの親のストレスになりうるものとして、①発達障害のある子ども自身に関わる側面、②発達障害のある子どもをとりまく周囲についての側面、の2つの側面を大きく挙げることができる(庄司, 2007); 小谷, 2007など)。

本研究では、広汎性発達障害児の母親に対して、我が子を含む家族に対する思いや捉え方の気づきを高める支援を行い、支援の有効性に関する検討を目的とした。

2. 方法

1) 対象者: 12歳(小6)の広汎性発達障害の男児(以下、A児)の母親を対象とした。父親、母親、A児、弟(2歳)の4人家族。父親(50代前半)はエリートサラリーマン、母親(40歳代)は専業主婦であった。両親ともに再婚であり、A児は母親の息子、弟は両親の実子であった。A児は、家庭において独語が多く、一方、両親とのかかわりでは暴言が多かった。学校においては、他児、支援員を叩く等の暴力、暴言があり、授業参加も乏しかった。WISC-III(12歳0カ月時実施)の結果は、VIQ109、PIQ79、FIQ94であった。

2) 期間・場所: 平成21年5月～平成22年2月まで、原則月3回計20セッション、大学の面接室で実施した。

3) 本研究開始までの両親の特徴及び家族の状況: 父親は平成20年7月にパニック障害と診断され、体調を崩しやすく欠勤気味であった。A児とのかかわりで腹が立ち、時にA児を叩いたり、暴言を吐いたりすることがあった。母親は、家事など完璧にこなさなければいけないと考える傾向があり、周囲に対して申し訳ないといった気持ちを常に抱えていた。父親の体調を気遣い、母親の外出時にA児と一緒に連れ出すなど、できる限り父親とA児の接触する機会を少なくするように配慮していた。

4) 支援目標及び支援方針: A児の家庭における不適切な関わり、学校生活の不応答から、両親のA児に対するかかわり方への改善が必要だと考え、主に第1期(1～11セッション)の支援目標とした。また、日々の生活に追われストレスを抱えている母親に対して、家族に対する母親の捉え方の気づきを高め、変容することが必要だと考え、主に第2期(11～20セッション)の支援目標とした。なお、学校へのコンサルテーションを併せて行った。

5) 手続き: 第1期では、A児の様子を聴き取る中で、A児のかかわりに関する目標を設定し、母親が実行可能な方法を整理し、実行・評価していった。第2期では、特に母親が家族に対する思い、考えについて表出できたとき、言語賞賛した。また、就寝前にTVを消した時刻、父親出勤状況、途中覚醒などに関する記録を毎日母親が取り、それらの記録に基づき、面接を行った。

3. 面接経過

1) 第1期: TVを消して寝るまでの一連の行動が9時までにはできた場合にトークンを与える課題を行った(#1～)。暴言や暴力なくやり過ごすことができたときの状況、対処法を絵で描いた「覚え書き」を母とA児とともに作成

した(#3～)。その他、修学旅行に行くまでの家庭での準備などを通して、A児の話を母親が丁寧に聴き取る時間を1日の中で適宜設定した(#3)。

一方、#4以降から、家族に対するふり返り、捉え方に関する表出が徐々に増えてきた。「どうして私ばかり我慢してはいけないのか」と父に言ったこと(#4)、自分の調子が悪くA児に怒ったときに誰かに止めてほしいと感じること(#6)、家族4人でいると母にとって耐えられないことが起こり、休日の夕方に母がA児を叩くことがあったこと(#7)、離婚の相談を父親に拒否され、「今のままで良いか分からない」と気持ちを吐露すること(#11)が見られた。

2) 第2期: #12において、青あざを作ってA児が来所した。それを機に、A児は両親2人の子どもであること、2人の子どもである以上A児を叩くことを止めるべきであることを母親に話し、母から父に直接それらの話をするように提案した。母親から、A児のせいで家庭がおかしくなっているため、父親に引け目を感じ続けている、との発言が見られた。#13では、母親から父親にA児を叩かないことを確認したこと、その内容をA児にも伝えたことの報告があった。父親が叩かないでいられた日には感謝の気持ちを伝えるなど父親に対する強化方法について整理した。

その後、A児と父親の状態が良い時には母ががんばっていることのコメントが見られたり(#14)、父親が手をあげそうになったら母親が止めることをA児と確認したり(#15)、母親なりの工夫が見られた。#16では、初めて医者に今の思いを全て伝えられたことを肯定的に捉える発言が見られた。また、「(父親への)心の重荷が軽くなった」、「これまで自分の身体状態に気づかないぐらい緊張していた」など、自分の思いや状態に対するふり返りの発言が見られた。さらに、「(これから)思いを)抱えずに言葉にしていこう」といった、今後取るべき行動を宣言するコメントもあった。#17では、父親に対して考えていることを伝えてほしいと要望したなど、父親とのコミュニケーションが高まっている様子が伺えた。

「弟が生まれてから慢性的な緊張と無力感が続いていた」、「両親で何とか取り組むのが軸になっていたから進んでこられた」といったふり返りの発言、「1カ月前は死んでしまえと思っていたが、今はいいとおしい」といったA児への発言が多く見られた。#18では、父親が疲れた理由を自発的に母親に話すようになったことの報告があった。余裕が出てきてA児の良い面に目がいき、を誉めることが増えている、との発言もあった。

#19以降は、両親がA児を叩くことはほとんどなくなり、学校でのトラブルも減少していった。さらに、父親は安定して出勤するようになった。

4. 考察

本研究により、家族の関わり方の変容が見られた。広汎性発達障害児を持つ母親に対する継続的なコンサルテーションが有効に機能したと考えられる。